アーノンクールと私 ❷ チェチーリア・バルトリ *Cecilia Bartoli* ●メゾソプラノ

# 彼は音楽を適切な言葉で説明でき、その正当性を証明できる人です

彼女が初めてアーノンクールに出会ったのは、1988年チューリヒ歌劇場で《フィガロの結婚》のケルビーノを歌った時であったと経歴にはあるが、バルトリにとって《ドン・ジョヴァンニ》のツェルリーナの記憶の方が鮮明なようだ。「モーツァルトオペラの女性像は皆、それぞれ異なった性格で生き生きと描かれており、音楽的ラインまで各々違っています。アーノンクールは、音楽を適切な言葉で説明でき、また、その正当性を証明できる人なので、彼の役柄への音楽的アプローチ、役柄にふさわしい表現を知ることは、役作りの上で貴重なものです」と語った。

しかし、彼の人となりを物語るエピソードのようなものはあるか、と尋ねると、一生懸命考えた挙げ句、「何度も食事を共にしたりする機会はありましたが、彼のプライヴェートはまったく分かりません。彼は、とても礼儀正しく、文化的水準の高い紳士ですが、あまり他人を寄せ付けず、独りでいることが好きなようです。まるで隠遁者のようなところがある独特の人ですが、それだけに、余計魅力的でもありますけれど」とだけ話してくれた。

アーノンクールが彼女の人生に与えた一番大きな影響は、古楽器との出会いである。「それまで、私は現代の楽器しか知りませんでしたが、彼のお陰で、その魅力に取りつかれました。今、コンサートツアーで共演しているオーケストラ「ラ・シンテッラ」も、古典分野では彼が育てたと言えるでしょう。彼らとの共演に必要な耳も、アーノンクールとの体験で培われたものです」

「私に現在のレパートリーを示唆してくれたのも、彼でした。私は、モーツァルトの先駆者たちのことを知りたかったし、知りたがり屋の私に、井戸の中をどんどん深くまで見せてくれるように、その前の世代のことを教えてくれました」。将来の展望を尋ねると、「ルネサンス期の作曲家、例えばモンテヴェルディなどに焦点を当ててみたいです」彼女の過去、現在、そして未来にまで、アーノンクールの影響力は相当強そうだ。

（中東生）

チェチーリア・バルトリ